

妻の故郷・小豆島を夫婦旅行・登山で満喫

妻の生まれ故郷は香川県小豆島。妻も島を出て以来、冠婚葬祭等での帰省はあったものの、山登りでは縁がなかった。

来年、夫婦共に85歳になり、結婚60周年を迎えるので、最後の機会かと夫婦での島めぐり・山登りに挑戦。

島に到着したその日は妻の実家近くの皇踏山(おうとざん)に登った。標高394mの低山だが、思いのほかの急登・険路に苦戦、親切な人に助けられて、何とか登頂し(妻は途中まで)、やっとの思いで下山して海に見えるホテルに投宿。

2日目レンタカーで寒霞溪(かんかけい)に。妻の勧めで私はロープウェイに乗って、溪谷美を愉しんだのち、車で迂回してきた妻と山頂駅で合流。昼食を済ませて、星ヶ城山(標高817m)に向かう。

最盛期は過ぎていているものの、紅葉、黄葉をちりばめた晩秋の景色を楽しみながら、山頂駐車場に13時すぎに到着。そこから針葉樹林の中の曲がりくねった登山道をたどって13:30 東峰山頂(817m)に到着。ここは小豆島の最高



↑二十四の摩崖

峰、阿豆沢(あずき)島神社があり、昔の烽火台跡が建っている。西側が開けていて、快晴の下風いだ瀬戸内海が眼下にひろがり、この上ない眺望。ベンチで軽食を摂り、結婚以来の来し方を語り合っ

て山を下った。午後3時台のフェリーに乗り、列車を乗り継いで同夜20時前に帰宅。

忘れられない旅行・山行となった。改めて妻に感謝。

山中難所でほとけに出会う

初日、皇踏山登山。あらかじめ入手していた地元商工観光課発行のパンフレット「皇踏山ハイキングコース」では、どのコースをとっても割と簡単に登れそうだった。土庄(とのしょう)港から山容を仰いで「岩山で急峻だなあ」と思ったことも忘れて、気楽に登山道に踏み込んだ。

踏み跡も定かでなく、道標も少なく、テープを探し探し、滑ったり転んだりしながら急登をたどった。妻は途中で引返し、私は少々焦り気味に先を急いだ。

岩場に差し掛かり、帰路の大変さをも思い、佇んでいると、下から一人の男性が追い付いてきた(仮にSさんとする)、私達よりも一回り若いが高齢者だ、小豆島生まれで母親の介護のため帰省中で、介護疲れをいやすために登ってきた、と自己紹介し、「途中で奥さんに会い、『夫と一緒に登ってほしい』と頼まれたので」と、私の後ろにくっつくようにして登り始めた。

↑土庄港からの皇踏山(左のピーク)

私がよろめくと支え、険しい所ではお尻を押して押し上げてくれた。

疲れ切った私には「仏様」に思えた。

私達は、お互いの登山歴などを話しながら登り、山頂直下のベンチに座って眼下に見える土庄町の町並みと瀬戸内の海、そこに点在する島々を眺めながら昼食とした。下り道でも足の置き場所も含めて、懇切な指導をしてくれ、足元覚束ない私を支えてくれ、転んだら引き上げてくれた。疲労困憊していた私にはありがたい、ありがたい仏様だった。

牧野富太郎が名付けたノジギク

ノジギク

花が少ない登山路で白い菊が咲いていた。私はリュウノウギクかと思っていたが、Sさんからノジギクだと教えられた。

ノジギクはあの植物学者・牧野富太郎博士が明治17(1884)年に高知県で発見し、命名した野菊の一種。ちなみに牧野博士はこのノジギクが日本の菊の原種だと考えていたようだが、現在その説には疑問が出されている。キクは奈良時代末か平安時代初期に中国からわたってきて薬用、観賞用として栽培されたが、元はチョウセンノギクとハイシマカンギクとの雑種だろうと考えられてい



る。「春の桜」と並んで日本の秋を代表する菊だが、春に種を播き、夏に育て、秋に開花というその栽培サイクルが稲作のそれと合致し、日本国民に親しまれたのだろう。枯れ葉色の広がる中で、くっきりとした白い舌状花と黄色の筒状花とのコントラストが目立った。

シマカンギクは二上山でも自生していて、花の少ない登山道を彩っている。

ホテルの窓から瀬戸内の夕景

この日泊まった宿は土庄港の対岸に建つ瀟洒なホテル。夕食後、部屋の窓から西側の海と島々がみわたせた。

はるか彼方の島影に陽が没すると、空は残照に染まり、それを映してうっすらと紅を一刷毛はいたような海面が次第に青黒く変わっていく。そこを白い大型船が左右から滑るように近寄り、すれ違って離れて行った。土庄港と岡山港とをつなぐ定期船らしい。2隻が創り出した白い航跡がしばらく海を漂い、それを縫うかのように海鳥が飛んでいたが、鳥は黒くにしか見えなかった。



蛇の抜け殻発見。金運、開運につながるか

皇踏山登山道で蛇の抜け殻を見つけた。長さ2m はあろうかと思われる長大な物。「アオダイショウのものでしょーね」とSさん。

私たちが子供のころ、へびの抜け殻を財布に入れておくと金持ちになれると言われ、しばしばズボンのポケットに入れて持ち歩いたが、小刀(肥後守と呼ばれ当時の子供たちは常時携帯していた)や硬貨と擦れ合っ

てポケットの中で粉々になったし、金運に恵まれた経験は皆無だ。

小豆島の史跡・名所を巡る

二日目、星ヶ城山から下山後、この島の名所を巡って、島の文化や歴史を学んだ。大阪城残石記念公園、宝生院のシンパク、中山千枚田、中山農村歌舞伎舞台、尾崎放哉記念館などなど。残石記念公園では、島の山々から巨石を切り出し、コロや修羅を使って港まで運び、船で大阪城まで運んであの大石垣を造った過程や道具などを見学し、当時の権力者の巨大な力と財力に驚くとともにその過程での諸作業に携わった人々の苦難・労苦を思わずにはいられなかった。妻は「何人もの人が死んだのだろうね」とつぶやいていた。



群像でも高峰秀子は美しかった

↑星ヶ城山山頂の烽火台跡

島を離れる前に、二十四の瞳碑を訪ねた。私の記憶では自転車でさっそうと走る大石先生役は香川京子だったように思うが、この島でロケを見た妻は高峰秀子で間違いないと言い切った、間近に見た群像でも大石先生は美しく、その俳優はやはり高峰秀子だった。

私達より少し前の時代を生きた人々の物語だが、戦争に振り回され、自らや家族の命をも奪われた人々の悲しみ、苦しみは実感をもって共感できる。

今、自民と維新の政治が戦争へと向かおうとしている時、改めて光を当てたい作品だ。

きたっ—！認知症 ガアーン！！

2025年12月10日日之出診療所で主治医の横山先生の診察を受けた。事前に撮ってもらっていたMRIの画像と血液検査結果表とを見ての診察後「松尾さん、残念ながら認知症が始まっています」の診断。「やがて来るもの」として覚悟はしていたものの、やはりショックは大きい。さらに続けて「登山者数も多く、松尾さんの友人、知人の多い二上山はともかく、他の山での単独登山はやめた方がいいでしょう」との言葉。これも「ガアーン」。



病気は病気で仕方ない。病とうまく付き合い、どう自分らしく最晩年を生きるか。最後の踏ん張りどころだ。

妻をはじめ、周囲に助けられながら、社会進歩に貢献できる生き方を貫けるよう頑張ろうと思う。